



2007.12 もちつき大会

戦国時代を迎えた医療

特定医療法人共和会 理事長
加藤 仁

2008年は病院の生き残りを賭ける時代が始まったと言っても過言ではないでしょう。

財務省は「社会保障費を5年で1.1兆円の削減」と明言し、1.1兆円の1年分、2200億円を削り、予測される年7000億円の増加を5000億円台増に抑えるよう厚労省に要請しました。2007年の医療機関倒産の特徴は「病院の倒産が非常に多いこと」これは医療機関の淘汰というより病院の淘汰が始まったという表現の方が正しいかもしれません。

厚労省の医療施設調査によると01年から07年11月には病院は9239施設から8892施設に減少。病院の倒産は07年の1月から5月までには12件と過去最多でした。要因として1)診療報酬の減額による減収 2)放漫経営 3)設備投資の失敗と続きますが病院の倒産が急増した背後には、国が経営悪化の病院を切り捨ての方向に動き始めたとも言われています。しかし倒産件数の増加は「氷山の一角」に過ぎません。その下では病院の閉院や診療所への転換や病院間の合併買収があり相当な数が減少しています。これらは精神科

病院よりも一般科の病院に多く見られます。近い将来には精神科病院も同様な危機に陥ると推測されます。何故ならば日本の精神医療はこれから「入院医療から地域医療へ」と変わろうとしているからです。まだまだ精神科救急医療、精神科地域連携の整備は充分ではなく、その施策は始まったばかりです。世界で最多の日本の精神病床の削減は今後必至です。

これまでも特定医療法人共和会は倫理的にも正しい選択をしてきたと自負しております。今後は生き残りをかけて「戦国の世」を駆け抜ける所存でございます。そのために何が必要かを問えば「患者様のために」「職員のために」、「優しい医療」と「楽しい職場」を提供するという使命です。今まで以上に共和会理念をしっかりと遂行していく事を皆様にお約束いたします。

特定医療法人共和会は日本の将来を担う子供さんからご高齢の方々まで心の健康も含め皆様への良質な医療・福祉サービスをご提供いたします。

2008年 元旦



日本医療機能評価機構
認定シンボルマーク

創立50周年を迎えるに あたって

共和病院院長 榎本 和

共和病院は1958年4月18日、68床の精神科病院として設立されました。初代の院長には名古屋大学精神医学教室・精神療法グループの大先輩である伊藤徹也先生が就任され、全開



1965年の共和病院

放病棟でひとりひとりの患者様に時間をかけて面接をされていたように伝え聞きます。5年後の1963年、伊藤先生が父上の跡を継がれるとのことになり2代目院長として岸田秋彦先生が就任されました。1965年には岸田院長のお薦めもあり創設者である加藤邦之助が名古屋の内科医院を閉め院長として就任しました。この時期のことは20周年記念誌「あゆみ」に述べられています。その頃から「アットホーム、患者様によりよい医療を」との理念でのんびりしたゆっくりペースで治療がすすめられ、生活療法、「俳句の会」、各種レクリエーションなど患者様中心に行われていました。「家族会」なども早い時期から設けられており現在もご家族中心に続けられています。

その後、病院のベッド数は少しずつ増え、1980年内科病棟が新設され、内科106床、精神科207床になり、一般内科の治療が充実しました。

1987年5月には精神科病棟の全面改築を行い、日本で唯一、全病棟から格子をはずしました。新聞にも格子のない精神科病院として取り上げられたのは記憶に新しいことです。改築を契機に青年期・心療科病棟を開設。10代、20代の若い患者様を引き受け全国的にも評価を得ました。残念ながら外部の医療情勢により青年期・心療科病棟は閉鎖し、若い方たちの入院は急性期治療病棟で引き受けています。1993年には加藤仁が院長となり「優しい医療・楽しい職場」の理念の



1980年頃

もと21世紀に向けての病院作りをはじめました。21世紀を迎えるにあたって何か記念になることをしようと「21世紀プロジェクト

チーム」をつくり2003年にC館を新築、認知症治療病棟・精神科急性期治療病棟・介護療養病棟（介護療養型医療施設）を設けました。また2005年には福祉ホーム「あしび」を開設し十数名の患者様の社会復帰をすすめました。厳しい医療情勢の中で病院機能を分化し、かつ特色のある医療、そして優しい医療を実現するのは大変ですが私たち病院スタッフは自らの力量を向上させ、地域に根ざした精神科病院として充実した医療サービスをしたいと考えています。



2003年C館



ソフトバレーボール V3 への軌跡

以前からバレーボールが大好きな方が多く集まり、グラウンドにはネットが張られ、活動はもとより、昼休みの短い休憩時間にもプレーに興し汗を流していました。当時は、硬いボールで、突き指をしたり、メガネを破損したりする事もザラでした。それから年月が流れビーチバレーや風船バレーなども流行し、誰でもできて、負傷の心配もなく本来のバレーの醍醐味が味わえるソフトバレーが広まりました。



当院でもより早くソフトバレーを活動に導入。平成16年、知多半島地域こころの健康フェスティバル・ソフトバレー大会に参加。第1回目の大会では3回戦目で断酒会チームに敗退したものの、翌年の大会からは連続3度の優勝。特に2回目の優勝の際、奇跡の逆転勝ちをおさめましたが、その際チーム名「クニちゃんズ」を永久不滅の名誉院長から戴きました。今回も、参加選手が全員出場でき、なにより楽しく試合ができたことが良かったと思います。

メンバーの努力は報われました。次なる目標は県大会に2位までに入り東海大会出場だ！と新たな夢を語っています。

看護部 柳田 博志

平成19年度 知多半島地域 こころの健康フェスティバル

平成19年11月17日(土)、知多市民体育館にて『平成19年度知多半島地域こころの健康フェスティバル』が行われました。当日は晴天に恵まれ、300名あまりの来場者がありました。

当日のプログラムは午前(講演会)・午後(ソフトバレーボール大会)の二部構成で、午前中に行われた、桜クリニック院長 笠原 嘉先生の『はたらく力とたのしみ力～こころの健康のために～』と題した講演では、「睡眠」に関しての笠原先生自らの経験談や、「うつ病」の治療などについてのお話が語られ、ときおり会場内が笑い声に包まれる、とても和やかな雰囲気での講演会でした。

また講演中には、一般来場者や当事者、家族、関係者等からの質問に、笠原先生がひとつずつ答えられ、予定時間をオーバーするほどの盛り上がりを見せていました。

今回の講演会のように、様々な立場の人が一堂に会し、それぞれの立場から語られる意見や経験談を共有できる場というのは、なかなか貴重な場面ではないかと思えます。講演会に参加された方々が、笠原先生だけでなく、そのほかに発言された方の言葉からも、何かを「お土産」として持ち帰ることができたのではないのでしょうか。

講演終了後は、体育館前の広場で行われている「こころふれあい市」に、たくさんの方が集まってこられました。うどん、ラーメン、カレーライスなどの模擬店、授産施設の自主製品やデイケア作品の販売等が行われたほか、フェスティバルでは毎年恒例となった、大道芸人ファニーントンボ・ワンマンバンドさんの演奏も行われ、大いに盛り上がっていました。

また、体育館二階ロビーでは、フェスティバルを主催する知多半島地域こころの健康づくり連絡協議会の各構成団体による展示コーナーや酒害相談コーナー、喫茶コーナーなどが設けられました。来場された方は、アルコールのパッチテストを受けたり、工夫を凝らした展示物に見入ったりしていました。

午後の部は、当事者を中心としたチームによるソフトバレーボール大会が行われました。大会には全部で10チームが参加し、トーナメント方式で熱戦が繰り広げられました。各チームとも、この日のために重ねてきた練習の成果を存分に発揮していたようです。

知多半島地域こころの健康フェスティバルも回を重ね、今年で9回目となりました。愛知県が主催するフェスティバルに比べると、小さな規模のフェスティバルですが、精神障がいについての理解を深め、精神障がい者に対する偏見を少しでもなくし、何より自分自身のこころの健康について考えていただく機会として、今後もこういった場に多くの方が足を運んでくださればと思います。

社会復帰支援部 白木 弘菜



編集後記



私の娘が通う保育園では、保護者を中心に毎年もちつき大会が行われます。

共和病院でも毎年盛大にもちつき大会を行っており、今回応援参加してきました。

作業療法士を主体に患者様の体験を交え、理事長や院長、各部門からの応援に加えて、なんと保育所の子供

たちも参加して大賑わい。

熱が入りすぎ、勢いあまって杵が割れるハプニングもありました。

当然?のこたながら、照れながら杵を持つ保育園のお父さんたちとは活気が違う様です(笑)。みなさんの協力で、例年以上に非常においしい餅が出来上がりました。(H.N)

朝刊に 目を通しましたか？

このごろ、外来を訪れることの多い「軽症うつ病」の経過をみていると、

あの苦しい「ゆううつ感」は比較的早く消失するようになりました。うれしいことです。しかし、それが消えた後に、かなり長い「おっくう感」の時期が控えていることを、ご存知ですか？

「なにもする気がおきない」「しようと思っても、手が出ない」「手が出ても根気が続かない」

この時期はふつう3～6か月くらい続きます。「苦しくないが、何もする気になれない」。この状態は周囲の健康な人には理解しにくい。つつい早すぎる復職を促して失敗します。しかし、この一見怠け者のな時期を



桜クリニック院長
笠原 嘉

通過しないことには「なかつた」といえない。

この時期を通過すると「喜びの感覚」が回復してきます。TVドラマや野球中継を今までのように受け身に眺めているのではなく、身をのりだして没頭出来るようになります。

サラリーマンの場合、私は「朝刊」を社会復帰の目印にしています。朝刊に興味を沸くということは(うつ病の人の苦手な)「朝に」、たくさんの字のつまった紙面を読む「根気」の回復した証拠であり、何よりも「社会への関心」が回復した証拠でもあります。

楽しむ力と働く力、この二つは表裏の関係にあるのです。



共和会理念

『優しい医療・楽しい職場』

私たちが目指す『優しい医療』とは!

- 患者様に安心と満足を提供する医療
- 良質且つ効率的な医療の提供
- 患者様へのサービスの充実

私たちが目指す『楽しい職場』とは!

- 毎日の出勤が楽しくなる職場
- 職員のレベルアップと仕事の充実が感じられる職場
- 職員の満足が患者様へ反映される職場

基本方針

～当院をご利用の皆様へ～

わたしたちは、利用者の皆様が安全かつ納得のいく医療を受けていただくことを目指し、それぞれの尊厳を大切に、思いやりのある医療を提供します。さらに、地域関係機関との密接な関係を保ち、地域の医療水準の向上に努めます。

- 1.あなたは、個人的な背景の違いや病気の性質などにかかわらず、必要な医療を受けることができます。
- 2.あなたは、医療の内容、その危険性および回復の可能性についてあなたを理解できる言葉で説明を受け、それを十分納得して同意したのちに、医療を受けることができます。ただし、必要に応じて主治医の判断によってご家族、代理の方にお話をする場合もあります。
- 3.あなたは、今受けている治療、処置、検査、看護・介護、食事その他についてご自分の希望を申し出ることができま。また、他の医療機関に転院したい場合は、必要な情報を提供致します。
- 4.あなたの医療上の個人情報は保護されます。
- 5.あなたの社会でよりよい生活が提供されるよう、地域関係機関との連携を図ります。

病院長 榎本 和



特定医療法人 共和会 **共和病院**

愛知県大府市梶田町2-123

TEL.0562-46-2222(代)

URL <http://www.kyowa.or.jp/>

漱石大好き

加藤 邦之助

久しぶりに本棚から漱石全集の中の草枕を取り出して読んでみました。

戻してきました。その時は意外に思ったのですが、今になって当用漢字ばかり使っている若い人には漱石の豊富な漢籍から出る言語が判らないのも無理もないこととつくづく思いました。

「草枕」の冒頭部分「山路を登りながら、かう考へた。智に働けが角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」は有名な一節で、以前に中学の教科書にも載っていました。今はどうでしょうか。千円札紙幣からも漱石が消えていく今日この頃まことに淋しいことに思います。それでも最近立ち寄った書店に漱石関係の沢山の本が一つのコーナーに揃えて置いてあったのに出会って、今でも漱石に興味を持っている人達があるのだなあと大変嬉しくなりました。

「草枕」は漱石自身俳句的小説といっていますが、何回読んでもその都度新しい感動を覚えるのです。久しぶりに読んだ今回も亦新しい感懐を催しました。

小説のヒロイン志保田那美が戦争に征く従弟をステーションで送る

個外では、私自身出征の見送りの当時に思い出されました。那美が五年前に離別した夫が零落の果満州へ行くという行では、日本が新しい国を造ろうとしていた戦前から戦中の苦しい思いが心の底に湧いてきました。そして那美の夫と従弟とが同じ列車でステーションを離れていく処では三人三様の思いがあり、「一言「憐れ」とだけでは言い表せない思いもかけない強烈な情感となつて、映画のラストシーンの様な鮮やかな印象として心に残りました。

しかし、貴方が初めて漱石をお読みになりたければ「坊っちゃん」が好いと思います。きつと読み出したら終わりまで止められないでしょう。そして忽ち漱石が好きになります。

明治二十八年から僅か一年暮らした松山中学校の事を、それから十年後にフィクションと言うもののあれだけ悪口雑言した松山の事を小説に書いたにも拘わらず松山には今も記念の館や漱石に因んだ物が沢山残っているという事は漱石の偉大さを充分に表しているではありませんか。漱石大好き……。